

#### 4. 伊豆長岡温泉にみる歴史的風致

伊豆長岡温泉とは、長岡地区に所在する古奈温泉・長岡温泉の総称である。この内、古奈温泉は、源氏山と呼ばれる小高い丘の東麓に湧出している。『吾妻鏡』にもその名が見え、鎌倉時代から湯治場として知られてきた歴史ある温泉である。一方、長岡温泉は明治40年(1907)、源氏山南麓において掘削により湧出し、大正・昭和期を通じて発展していった。古奈温泉には湯谷神社、長岡温泉には温泉神社といういずれも温泉に関わりのある神社が鎮座している。



かつての古奈温泉の様子

大正年間から昭和初期にかけては、多くの旅館が開業するとともに、犬養毅、田中光顕、平沼騏一郎、宇垣一成ら政界の名士たちが次々と別荘を構えた。また、荻原井泉水や与謝野晶子、若山牧水、窪田空穂、北原白秋、武者小路実篤ら多くの著名な文人が滞在し、作品を執筆したことでも知られている。

このように、多くの宿泊客が訪れるようになったことから、各種の娯楽への需要が高まり、芸妓置屋が設けられたり、大正2年(1913)に長岡座、大正末年にあやめ座といった劇場が開業したりするなど、温泉街としての様相が整えられていった。昭和30年代頃、古奈と長岡の置屋を統括する「見番」が統合されて「伊豆長岡見番」となり、現在も存続している(昭和52年(1977)に伊豆長岡芸能事業協同組合が正式名称となる)。長岡温泉にある伊豆長岡見番の建物は、昭和25年(1950)に建設された和風建築である。この伊豆長岡見番を中心として、伊豆長岡温泉には、踊りや、お座敷での遊びなど、芸妓衆による伝統芸能が今日まで受け継がれている。

古奈温泉には、古くからの旅館が軒を連ね、風情のある「あやめ小路」があり、そこには当時化粧メーカー大手であった株式会社ウテナの創業者、久保政吉の別荘として昭和9年(1934)に建てられた、3棟の近代和風建築を前身とする「古奈別荘」がある。また、古奈温泉の北端に位置する「三養荘本館」も、三菱財閥の3代目総帥岩崎久彌の別荘として建てられた昭和初期の近代和風建築であり、古奈温泉を代表する建造物のひと



長岡温泉街 温泉場出逢い通り  
源氏あやめ祭の様子



古奈温泉街 あやめ小路

つとなっている。古奈別荘は昭和 14 年(1939)、三養荘は昭和 22 年(1947)から旅館として営業しており、いずれも格式の高い旅館として、長年にわたって伊豆の国市の迎賓館とも言える役割を担っている。

長岡温泉は、明治 43 年(1910)に初めて温泉旅館が建てられてから次第に発展し、温泉街を形成してきた。現在も、多くの旅館・ホテルがあり、街並みの様相は、大勢の観光客で賑わっていた昭和 30 年代頃の雰囲気を残している。この長岡温泉の中心を通る道には「温泉場出逢い通り」の道路愛称が付けられている。

## (1) 伊豆長岡温泉の歴史的風致を構成する建造物

### ①古奈別荘

古奈別荘は、古奈温泉の中でも、いくつもの旅館が軒を連ねる「あやめ小路」に位置し、源氏山の東側斜面を利用した、複数の離れ家によって構成されている。その内、「宇治」「田舎家」「京家」の 3 棟は、久保政吉の別荘として昭和 9 年(1934)に建設された近代和風建築で、良材をふんだんに用いた数寄屋風の建物となっている。

宇治は、木造 2 階建の寄棟造茅葺。1 階は玄関と四畳半、2 階が八畳の小振りな建物だが、茶室として普請されたもので、落ち着いた佇まいを見せる。田舎家は木造平屋建、寄棟造茅葺で、座敷八畳、次の間八畳と四畳半 2 室からなる。京家は、木造平屋建、寄棟造瓦葺で、座敷六畳と四畳半で構成されている。三棟ともに状態はよく、昭和 14 年(1939)の開業以来、今日まで旅館の客室等として利用されている。また、敷地内の他の建物も、昭和 20 年代頃までに建築されたものである。



古奈別荘 宇治

### ②三養荘本館

古奈温泉の北端に位置する「三養荘」は、三菱財閥の 3 代目総帥岩崎久彌<sup>ひさや</sup>の別荘として建てられた「本館」をはじめ、「新館」や「離れ」など複数の建物と広大な日本庭園からなる。昭和 22 年(1947)から旅館として営業しており、本館の建物も、建築当初の様相をよく残しつつ、現在も客室として利用されている。

三養荘の名は久彌の命名になるもので、『養生雑訣』に「思慮<sup>すくな</sup>を寡くして以つて神を養ひ、嗜欲<sup>しよく</sup>を寡くして以つて精を養ひ、言語を寡



三養荘本館 居間・書斎棟

くして以つて気を養ふ」とあることから名付けられたという。

三養荘本館は、昭和4年(1929)から11年(1936)に建てられた「玄関・茶室棟」「客間棟」「中央棟」「居間・書斎棟」と、昭和32年(1957)の昭和天皇行幸に際して増築された「御幸の間」からなり、これに庭園の「待合」と茶室へと通じる「露地門」が附属している。本館は分棟形式で、「玄関・茶室棟」「客間棟」「中央棟」「居間・書斎棟」が雁行し、そこから渡り廊下で「御幸の間」へと接続する配置となっている。いずれの棟も、岩崎家の別邸に相応しく、選りすぐりの材を用いた京風の建物で、庭園との調和にも優れた近代和風建築の作例として、平成29年(2017)6月に国の登録有形文化財に登録された。

### ③伊豆長岡見番

源氏山西麓に位置する伊豆長岡見番の建物は、昭和25年(1950)に建てられた木造瓦葺2階建の近代和風建築である。昭和30年代半ば頃まで、現在地近くの池の中の島にあり、赤い太鼓橋で対岸と行き来するようになっていたという。その後、池の埋め立てにともない、現在地に移築された。2階は、舞台がしつらえられた座敷となっており、稽古場として、また「菖蒲御殿」と名付けられた劇場として用いられていた。現在、稽古は1階に増築された稽古場で行われている。



伊豆長岡見番

### ④湯谷神社

湯谷神社は、古奈地区に鎮座する神社で、大己貴命と少彦名命を祭神とする。元々は「二社大権現」と呼ばれていたが、明治維新後の神仏分離にあたって現在の名称となった。「湯谷」の名は、神社奥の岩より温泉が湧き出していて、古奈温泉発祥の地となったという伝承による。現在の覆屋兼拝殿は、昭和40年(1965)に建築されたもので、その中に二間社こけら葺の本殿を納める。



湯谷神社

## ⑤温泉神社

長岡地区に鎮座する温泉神社は、おおくにぬしのみこと 大国主命・男沙胡神・女沙胡神を祀る。古くは子神社・男石神社・女石神社の三社であったと伝えられている。

現在の社殿は、昭和19年(1944)に再建されたものである。一間社流造銅板葺の覆屋兼拝殿の中に、本殿を納める。また、境内に立つ石柱に刻まれた「温泉神社」の文字は、長岡温泉に別荘を構えていた平沼騏一郎きごうの揮毫になる。



温泉神社

## (2) 伊豆長岡温泉の祭と芸妓文化

### ア 源氏あやめ祭

あやめ御前あやめのまへ(菖蒲前)とは、平安時代の武将源頼政げんざん み にゅうどう(源三位入道)の妻である。頼政は、「平家物語」の中で、宮中に出没する怪物「鵜」ういを退治した武将として知られている。あやめ御前は古奈出身で、若くして父とともに都に上り、鳥羽上皇に仕えたという。頼政が、その美しさからあやめ御前を見初め、鳥羽院の許しを得て妻としたと伝えられている。古奈地区には、あやめ御前の旧宅跡や手植えの桜などがあり、いずれも市指定の文化財となっている。この縁により、伊豆長岡温泉では、昭和9年(1934)から、あやめ御前を偲ぶ祭として「源氏あやめ祭」を開催してきた。



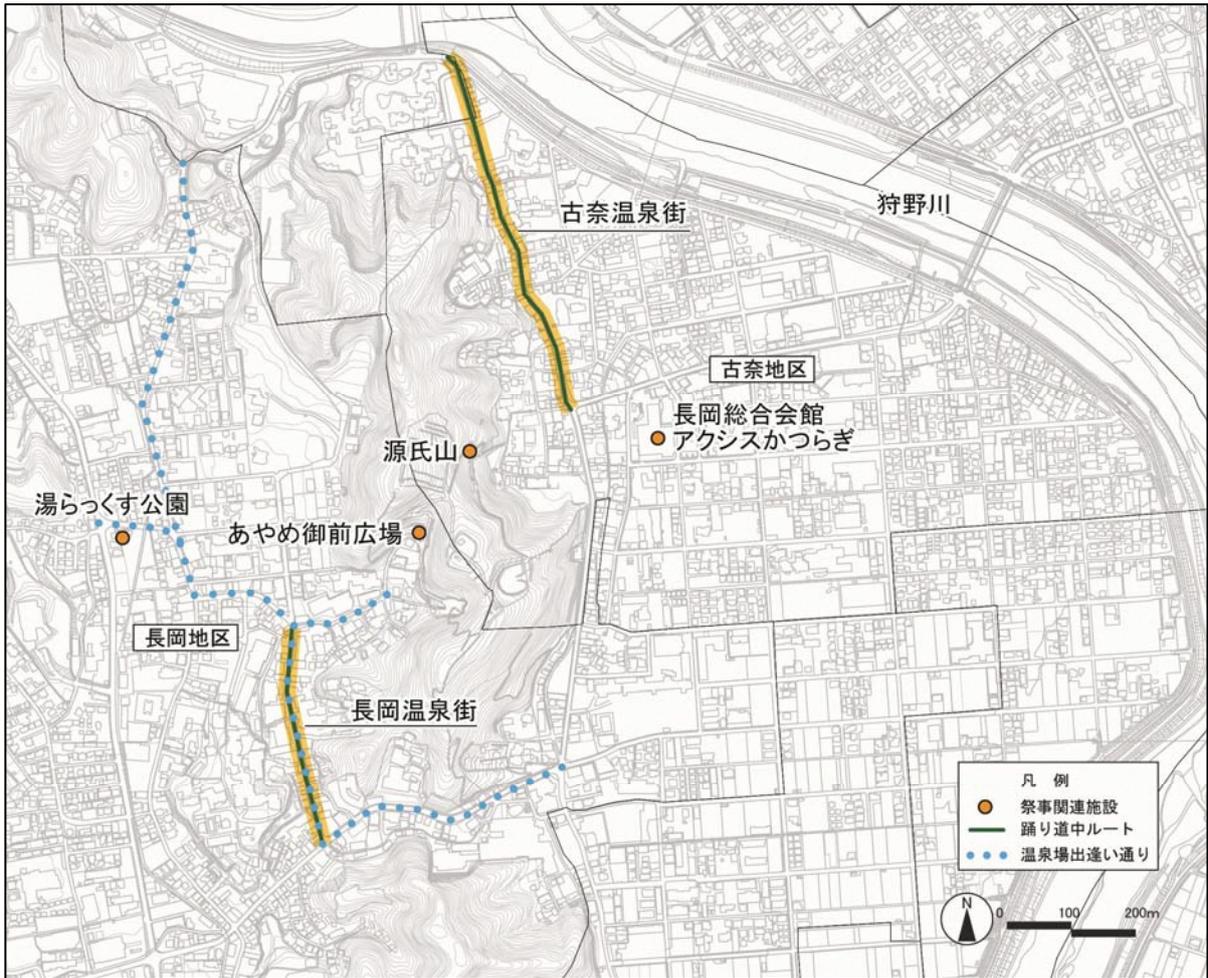
源氏あやめ祭 (あやめ御前供養祭)

祭が始められた当初は、昭和5年(1930)の北伊豆地震からの復興と、伊豆長岡町制施行を盛り上げようとの狙いもあったという。開始以来平成29年(2017)で82回を数える。

現在は、7月初旬に、一般社団法人伊豆の国市観光協会主催、伊豆の国市・源頼朝観光推進協議会後援、伊豆長岡温泉旅館協同組合・伊豆長岡芸能事業協同組合の協力によって実施されている。

源氏あやめ祭の内容は時代によって変化があるものの、時代行列や芸妓衆の練り歩き等の華やかな催しを中心に、地元の人々も温泉の宿泊客も楽しめる盛大な祭として続けられてきた。今日では、「あやめ御前広場」での「あやめ御前供養祭」を皮切りに、「伊豆の国市長岡総合会館(アクシスかつらぎ)」での歌謡ショー、「湯らっくす公園」でのお祭り広場、「古奈温泉街」「長岡温泉街」での踊り道中、「源氏山」での花火打ち上げなどが、三養荘・古奈別荘の所在する古奈温泉と、伊豆長岡見番の所在する長岡温泉を舞台に行われている。これまで80回以上にわたって続けられてきたことで、伊豆長岡温泉を代表する祭のひとつとして定着している。

図 2-4-1 源氏あやめ祭範囲図



### イ 芸妓文化の継承

伊豆長岡見番を中心として、伊豆長岡温泉には芸妓衆による踊りなどの芸能が、今日まで受け継がれている。明治 40 年(1907)の長岡温泉湧出後、初めて旅館ができた明治 43(1910)年以降に誕生した伊豆長岡見番は、その後の温泉街の発展とともに成長し、昭和 30 年代には、所属する芸妓が 400 人を超えるなど最盛期を迎えるに至った。

そうした中、芸妓衆の芸の向上を目指すため、昭和 35 年(1960)頃、伊豆長岡見番内に公認伊豆長岡芸妓学校(公認静岡県芸妓学校)が開設される。この芸妓学校は、京都を除くと伊豆長岡

にしかない芸妓専門の学校であり、伊豆長岡温泉の芸妓の育成を一手に担う養成機関であった。学校という組



芸妓による舞踊

織としては昭和 63 年 (1988) に休止されたが、それ以降も伊豆長岡見番は、芸妓衆が芸を学び、稽古を積む場所としてこれまでの伝統を引き継いでいる。

芸妓衆は、伊豆長岡見番において花柳流の舞踊、藤本流の三味線、民謡、小唄、端唄、仙



右 見番の玄関に掲げられた師匠方の名札  
左「公認静岡県芸妓学校」の看板

波流の鳴物等を師匠から習い、また稽古を積んで腕を上げていく。なお、初めて入門した半玉(芸妓の見習)は、まず「見かえり富士」と「あやめ音頭」という長唄や舞踊の稽古をすることとなっており、このしきたりは今日も続いている。

このように、芸妓学校の伝統を受け継いだ芸妓衆が、伊豆長岡温泉の温泉街・観光地としての営みに彩りを添える存在として、現在もなお芸妓文化を継承している。そして、三養荘や古奈別荘をはじめとする温泉旅館のお座敷で、伊豆長岡見番での稽古で身につけた芸が披露されているのである。

また近年では、お座敷のみならず一般にも芸妓文化を発信していくための試みとして、伊豆長岡見番での稽古見学や、市内の会館や三養荘を会場として踊りなどを公開する「伊豆あやめ座」が行われている。

## ウ 湯谷神社・温泉神社の例祭

湯谷神社では、例年 10 月 9 日に宵宮祭、同 10 日に例大祭が行われている。氏子への聞き取りによれば、少なくとも明治時代以降継続して実施されているという。宵宮祭では、本殿にて神職による神事が執り行われた後、三つの神輿が古奈地区の各旅館に立ち寄りつつ練り歩く。



宵宮祭 湯谷神社に向かう神輿



宵宮祭 古奈地区を練り歩く神輿

翌日の例大祭では、翌年4月に小学生となる児童を対象に稚児を募り、長岡総合会館(アクセスかつらぎ)前から湯谷神社まで稚児行列が行われ、神社本殿でお祓いを受ける。昭和36年(1961)の例大祭で、稚児行列に参加した子どもたちの写真が、地元の氏子宅に保管されている。



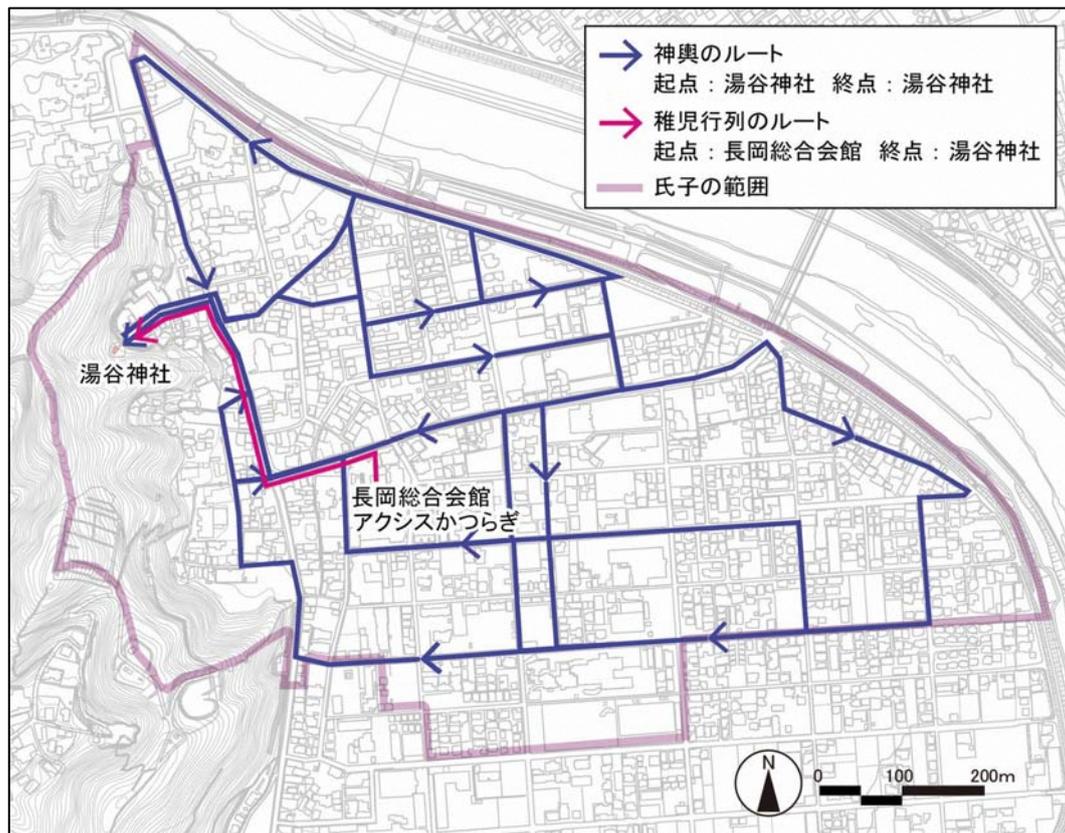
例大祭 稚児行列



昭和36年の稚児の集合写真

温泉神社の例祭は、良質な温泉の湧出に感謝する祭で、毎年3月末に、伊豆長岡温泉旅館協同組合を実施主体として執り行われている。この例祭には、温泉旅館関係者をはじめ、芸妓衆も参加して祭に華を添えている。また、例祭に前後して湯汲み式と餅撒きが行われる。

図2-4-2 湯谷神社の神輿、稚児行列のルート



### (3) まとめ

古くからの湯治場である古奈温泉と、近代に入って湧出した長岡温泉は、伊豆長岡温泉として、芸妓文化を含む温泉街の文化や景観を育んできた。そうした営みの中で、土地に伝わる祭のみならず、源氏あやめ祭も多くの回数を重ね、地域の伝統として定着している。昭和初期の建築を含む温泉街の景観とも相まって、後世に伝えていきたい良好な歴史的風致を形成している。

図 2-4-3 歴史的風致範囲図

